

長野県上伊那郡宮田村

中越遺跡

昭和43年度緊急発掘調査概報

昭和44年3月

宮田村教育委員会



「中越遺蹟」正誤表

(一) 昭和43年度緊急発掘調査概報

| | 誤 | 正 |
|--------------------|------------------------|--------------------|
| P. 13 図16 | 第19号址の位置第6 T 13号 方形 | 第7 T (図1参照) 長方形 |
| P. 15 | 第16・29号住居址 | 第9・31号住居址 |
| P. 17 図24 図26 | 第9・31号住居址 | 第16・29号住居址 |
| P. 24 第14行 | 近いものなら | 近いものから |
| P. 6 左第27行 第31行 | Soft. Loam 〃 | ソフト ローム 〃 |
| 第40行 | 〃 | 〃 |
| 右第12行 | 〃 | 〃 |
| P. 6 左第24～25行 | 羽状文 | 羽状繩文 |
| P. 10 左第13行 | エンド スクレバー | エンド スクレバー |



図1 中 越 遺 跡 全 景 《番号は注記番》

はしがき(2)

発掘調査にあたって(5)

発掘調査の経過(6)

発掘調査の結果(13)

ま と め(23)

図1~34



図2 中越遺跡遠望（東方の山地より）

はしがき

最近、伊那谷においても各所に開発事業が活発になり、これに伴って、埋蔵文化財の緊急発掘調査が行われだしている。このように文化財保存思想の高まってきたなかで、中越道路の緊急発掘調査が実現できたことは、まことにありがたいことであった。

昭和31年、本遺跡の発見当時から、この重要性が知られ、調査の進行が叫ばれていたが、これが実現しないでいるうちに、最近、新しい住宅がまつまつ建てられてきたので、早い時期に、この保存を計らねばと思いつつ、2～3年が過ぎたが、遂にこのたび発掘調査に踏みきったのである。それは、宅地化が急速に進んできしたこと、国や県の補助金と指導が受けられること、村理事者が文化財保護についての配慮を示されたこと等、条件が整えられたからであった。

この経過の大要を述べるならば、この地は宮田中学校建設当時は四面皆畠地であったが、平坦地で、村の町部に接していて、交通の便もよく、且、学校の所在地という事で、近年住宅が盛んに建てられるようになり、ここ数年のうちに20数戸を算えるに到了。このままでは数年を出でずして、遺跡の発掘調査は不可能になるのではないかと心配され、緊急発掘の必要を痛感された。

たまたま、昭和42年から、林茂樹指導主事の指導により、国・県の補助事業として、緊急発掘の見

通しを得たので、昭和43年度実施事業として国・県に申請した次第である。この地は全部私有地であるから、土地所有者の協力を得なければ調査は不可能であったが、十数人の所有者の方々がごくごく全面的にご協力下さったので事業は完全に遂行できたのである。

宮田村教育委員会としては、発掘調査委員会を、教育委員・文化財委員・地主代表者・小中学校長等で組織し、村長・議長・地元議長を顧問に委嘱した。そして林茂樹指導主事の指導により事業計画をたて、調査団長に探査高校教諭藤沢宗平先生をお願いする事に決め交渉したところ、先生のご快諾を得たので、6月10日調査委員会を開催し、藤沢先生のご来村を願い、現地の視察を行ない、又、調査団員の選考を行なった。

調査団員は、別に述べてあるように、松本県ヶ丘高校教諭樋口昇一先生・松本博物館小松虔先生を始め十名の諸先生を選考し、上智大学教授八幡一郎先生・長野県考古学会長藤森栄一先生を顧問にお願いする事に決め、其の交渉を林茂樹指導主事にお願いした。

6月25日、国・県の緊急発掘許可内定書の交付を受け、地主関係者の承諾を得たので、8月26日調査委員会を開催、同27日起工式を行い、9月1日より発掘を開始した。発掘経過の詳細は後文のとおりであるが、8月中天候不順にて心配されたが、事業に着手してから全く天候に恵まれ、9月8日発掘終了、12日まで調査を行ない、予定どおり終わることができたのは、ありがたいことであった。

繩文早期住居址の発見数は、事業着手前の予想をはるかに越え、30戸に及び、其の分布の限界を究めるに到らず、引き続き調査する必要があるといわれるほどの成果を挙げることができたのである。

この発掘調査の実施にあたり、補助金や調査についてご指導をいただいた文化庁ならびに長野県教育委員会、御指導をいただいた顧問の先生方、連日熱心に調査に当られた調査団の方々、快く発掘を承諾された土地所有者の方々、調査に労力を提供された老人会・婦人会の方々に対し、深甚なる感謝の意を表す次第である。

昭和44年3月

宮田村教育委員会 教育長 細田 岩徳

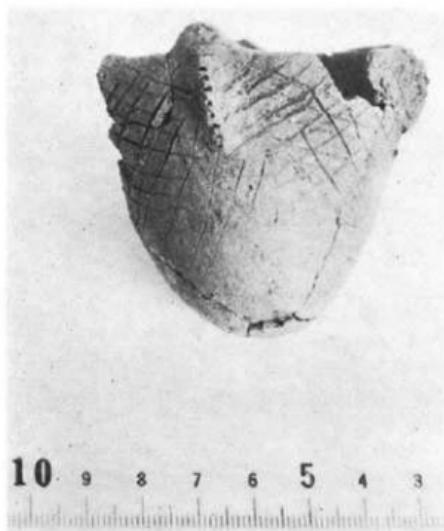


图3 尖底土器(第14号住居出土 宝物大)



图4 中越道路位置

発掘調査にあたって

本遺跡は、飯田線宮田駅より北東へ800メートル余、国道から東へ300メートル、最近開通した一般国道153号線より東へ100メートルほど、宮田中学校の北に位置している大田切川扇状地左翼の堆積面、一帯に畑地であり、あたりはふるく中越西ヶ原とよばれた縄文期の大遺跡地帯、今回の発掘対象となつたいわゆる「中越遺跡」だけでも30アールほどの広さはある。

今回の緊急発掘にあたっては、調査委員会をつくり、調査団をお願いして、昭和43年9月1日より調査をすすめたのである。

中越遺跡緊急発掘調査委員会

| | | | | |
|--------------------|-------------------|-----|---------|-----------|
| 委員長 | 宮田村教育委員会委員長 | 馬平 | 人男重 | 長野県考古学会会員 |
| 副委員長 | 宮田村文化財委員会委員長 | 向山 | 一弥登藏茂彦 | |
| 委員 | 長野県文化財専門委員 | 中木田 | 一一雅敏芳徳義 | |
| " | 宮田村教育委員 | 中沢 | 良良 | 一保男三 |
| " | " | 小田切 | 幸強 | 三載徳男 |
| " | " | 野田 | 知義 | 穂愛政行 |
| " | " | 日賀 | 太春 | 穂愛雄 |
| " | (現場責任者) | 有堀 | 友太春 | 長野県考古学会会員 |
| " | () | 細井 | 有堀 | 長野県考古学会会員 |
| 地主代表 | 宮田村小学校長 | 田木 | 田木鳥切 | |
| " | 宮田村中学校長 | 鳥切 | | |
| " | 宮田村教育委員会教育長 | | | |
| 顧問 | 宮田村長 | | | |
| " | 宮田村会議長 | | | |
| " | 長野県会議員 | | | |
| 中越遺跡緊急発掘調査団 | | | | |
| 顧問 | 上智大学教授 長野県文化財専門委員 | 八幡 | 一郎 | 日本考古学協会会員 |
| | 長野県考古学会長 | 森沢 | 一宗昇 | 日本考古学協会会員 |
| 団長 | 松本潔志高校教諭 | 口 | 一平 | 日本考古学協会会員 |
| 調査員 | 松本県ケ丘高校教諭 | 松藤 | 一慶六 | " |
| | 松木博物館 | 藤 | 攻之夫 | " |
| | 富士見町教育委員会 | 前 | 凸信郎 | " |
| | 長野県埋蔵文化財緊急調査員 | 平 | 志正明人 | " |
| | " | 那 | 泰隆 | " |
| | " | 藤 | 守秀 | " |
| | " | 下 | 芳時 | " |
| | " | 佐 | 勝茂 | " |
| 調査補助員 | 飯田市箕瀬町 | 木下 | 茂樹 | 日本考古学協会会員 |
| | 伊那市 | 達 | (向山雅重) | |
| | " | 佐 | | |
| | 東春近小学校教諭 | 木 | | |
| | 箕輪町 | 根 | | |
| | 岡谷南部中学校教諭 | 御 | | |
| | 宮田小学校教諭 | 長 | | |
| | 宮田中学校教諭 | 小 | | |
| | 宮田村土木課長 | 本 | | |
| | 伊那市 | 長 | | |
| 事務局指導 | 宮田村教育委員会 | 中 | | |
| | 長野県教育委員会指導主事 | 清 | | |
| | | 山 | | |
| | | 加 | | |
| | | 林 | | |

発掘調査の経過

昭和43年9月1日 日曜日 曜

午前8時宮田中学校校庭に集合、委員長、教育長、同僚、同僚の紹介、9時より作業開始、昨日予定されていた、トレンチに同僚を割当る。

第1号トレンチ、L22.5m W2m 小松 處
第2号トレンチ、L25.7m W2m 御子柴泰正
第3号トレンチ、L26.2m W2m 佐藤 政
第4号トレンチ、L26.3m W2m 戸前 博之
第5号トレンチ、L25.7m W2m
第6号トレンチ、L25.3m W2m 下平 秀夫
第7号トレンチ、L24.7m W2m 太田 保
第8号トレンチ、L24.6m W2m 遠藤麻呂
第9号トレンチ、L24.5m W2m 友野 良一
第10号トレンチ、L14.0m W2m 木下平八郎
第11号トレンチ、L14.3m W2m 根津 清志
第12号トレンチ、L14.4m W1m 長瀬 康明
各トレンチ間は、3m間隔 12本のトレンチを設定。
第1～第12号トレンチに発掘人員を配分、第1号トレンチ第9地区に、住居址を確認、又第9地区と第1地区を除いた箇所表土下、深30cm以前に、W50～80cm、径5～15cm犬の集石を発見。集石は黒色土中が大部分を占めていた。石器及び土器多数を発見。

第2号トレンチ、第1地区、第3地区～第4地区、第5地区～第6地区に住居址を認める。土器は 無文、羽状文、撲糸文等出土。

第3号トレンチ、表土45cm、褐色土層10cm以下 Soft. Loam. 本トレンチに於いては、第2地区～第5地区間に1箇、第6地区～第8地区に1箇、第9地区に焼土及びビットのみで不確実ではあるが1箇、第12地区に1箇、計4箇の堅穴住居址を発見。

第4号トレンチ、表土より Soft. Loam. まで70cm前後、第8地区～第10地区に堅穴住居址、第3号トレンチの方向に伸びる。第11地区～第12地区堅穴住居址、これは第5号トレンチの方向に伸びているらしい。石鍔、石鉤、石臼、花崗岩の頭大の自然石が多く発見された。その他の土器片多数を発見。

第6号トレンチ、第6地区～第8地区北側の壁に向って堅穴住居址を確認、第9地区～第10地区に円形プランを発見。そのほかに立石及び配石遺構を認める、遺構はすべて Soft. Loam. に切込まれている。遺物、石鍔、土器片を多数発見。

第7号トレンチ、午後3時より発掘、第2地区～第3地区表土下50cm、頭大自然石15箇、第6地区にW1mの黒色土の落込みがあり、住居址として確認、この住居址は第6号トレンチの方向に伸びているようである。第2地区～第3地区に発見された、頭大の自然石が、本住居址にも検出される。遺物は石鍔、土器細片。

第8号トレンチ、本トレンチは東西24m、W2m、東側第1地区～第4地区間に河原石が褐色土層まで多量に散布、第4地区～第8地区までに黒色土層の落込みを認める。

西側第12地区にも落込みを発見、これ等3箇所は何らかの遺構かと思われる。明日は、この第3地区を対象として調査を進める予定、出土遺物は、石鍔・石臼・局部磨製石斧・打製石斧・土器片。

第9号トレンチ、東西20m、第1地区～第5地区迄の除去を行ったところ、地表下30cm、黒色土層中に頭大的自然石が多く発見される。第8地区は黒色土を取除いたのみで、本日のところ作業を終る。本トレンチ出土遺物は、自然石利用の石斧・土器片若干。

第10号トレンチ 黒色土層50cmの耕土、トレンチの長さ14m、黒色土中に転石及び、遺物が多く出土、一部ピットらしきと、地表下60cmに Soft. Loam. を発見、その附近の黒色土の深い落込みは、住居址ではないかと考えられる。遺物は、石鍔、石臼、石斧等発見。

第11・第12号トレンチ、黒色土は25cm内外で、この黒色土中に転石が多い、この転石中に土器が多数混って発見される。本トレンチは人員が少いため本日のところ、黒色土層25～45cm程度の除去を行ったのみで、明確な遺構は認められなかった。

午後4時30分、本日の作業終了、タカノ製作所厚生会館にて、17時30分～19時まで、調査員打合せ、明日の発掘計画を立てる。調査員の宿舎は、タカノ製作所厚生会館が当たっている。

本日の見学者、戸田先生、新聞社は、読売新聞、中部日本新聞、信濃毎日新聞。

出席者

調査委員 細田敏徳、平沢一男、田中敏一、平沢茂、田中義蔵、篠田德登、小田切良彦、友野良一、太田保、有賀強三、向山重義、馬場一人。

長野県教育委員会指導主事 林茂樹。

調査員 滝沢宗平、小松虎、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、遠藤麻呂、木下平八郎、根津清志、御子柴泰正、長瀬康明、長 隆、中村芳夫、同志社大学 吉朝、小山。

事務局 宮木芳秀、春日幸男。

協力者 加藤幾藏、加藤茂寿、新井慶成、酒井不二、小沢せい、中山くに、井上政量、清水宗吉、大長銀蔵、春日松巳、北沢理智恵、三浦正雄、伊藤梅太郎、小林文吾、篠田源一郎、小田切平治、細田豊、芦部政市、平沢菊雄、平沢清志、春日喜代江、油野チエ、田中勝子、浦野定雄、天野彦吉、宮下実美、清水唱三、小田切幾藏、浜田千尋、伊藤嘉市、木下進、保科成一、小田切正明、吉沢翠、平沢和雄、松田初治、宮下富之進、神谷政雄、戸田真義、宮下八朗、小林正義、平沢よし子、吉沢たかね、伊藤光雄、馬場正雄、吉沢実、吉沢正広、久保田うめ、小田切宗吉、春日一正、春日時江、平沢茂則、田中むづ子、小田切島敷、小木曾狂二、川手一治郎、清水裕明、浜田ひさ子、片桐哲、初崎常利 小田切保徳。

9月2日 日曜日 晴

作業第2日、如葉時8時15分、終業時16時、昨日の調査の成果に依り、第1号トレンチの内、第6号址を小松

處、第7号址を太田保、第8号址を友野良一、第3号トレンチを佐藤政、第4号トレンチ戸前博之、第6号トレンチ下平秀夫、第8号トレンチ遠藤麻呂、第10号トレンチ木下平八郎、第11号トレンチは一部中学生担当し調査を行う。

本日の作業は第1号トレンチでは、第7～第10地区の除土と集石の実測、小松庭。第5～第7地区間太田保。

一部床面とピット及び、壺型土器の戻れた集り等発見し得て、住居址らしき色が濃厚となる。第2～第4地区にわたる、集石の実測を友野が行い、午前中に終了。集石を取除きそれより下部の発掘を行う。第1～第2地区に、黒色土の落込みが深く一部に床面を免見、住居址であることが略々確定となる。

第3号トレンチ、第3号トレンチの土を、第4号トレンチの第2～第5地区間に移動して試張、第9号住居址の遺構全体を本日のところ確認することはできなかった。

第4号トレンチ、第10号住居址は北部の拡張により、住居址の北限を確認、第10号住居址の西1.5mに、第18号住居址が隣接、又住居址の北側、第5号トレンチに、他の住居址があるらしい。

第6号トレンチ、第6号トレンチの第8～第10地区迄の住居址のプランの確認と、又南と北に拡張したが、この箇所のプランは明確にすることができない。作業はベルトコンベアを使用。

第8号トレンチ、午前中第8・第9両トレンチの第1～第5地区間の表土の除土、午後第12・第13・第24号住居址を確認することができた。第12・第13号住居址は花崗岩の頑丈の転石が非常に多い、土器片多数出土。

出露者

調査委員 鈴木徳、平沢茂、田中義蔵、鈴田登、小田切良意、友野良一、太田保、向山雅重、平沢一男。事務局 宮木芳秀、春日幸男。

調査組員 藤沢宗平、小松庭、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、遠藤麻呂、木下平八郎。

協力者 岸上政重、清水末吉、大長銀蔵、春日松巳、北沢里智恵、三浦正雄、伊庭梅太郎、鷹田翠一郎、小林勇、小林富士男、春日高代江、田中勝子、浦野定雄、天野彦吉、清水啓三、小田切幾造、浜田千鶴、春日忠也、百沢乙丙、小田切正明、加藤光男、吉沢翠、宮下富之進、神谷政雄、小林夏江、平沢よし子、田中ゆり子、初崎文子、吉沢たかはる、馬場正雄、吉沢正廣、春日一正、小木曾莊二、手川一治郎、湯川昌道、後藤真一、祠山一郎、砂場久江、佐藤はな子、松崎達、酒井直三、富田武男、小木曾宗吉、井桐見、小田切島数。

中学校生徒の応援延170時間。

9月3日 火曜日 晴

午前8時15分作業開始、本日よりベルトコンベア3台を使用し、能率をおげる。各トレンチ及び住居址の担当は前日と同じ。小松庭氏の担当、第6号住居址は完全に撤去し、口縁部破片で陰帯文の垂下した、円底の変形土器を発見したことにより、第1回調査の第1号住居址で発見された土器と同時期のものと考られる。床面上に黒色の炭化物灰層等の堆積により、本住居址は火災にあったのではないか、土器片多数、石匕、スクレーパー、石皿

等出土。



図5 第6号住居址出土尖底土器

第1号トレンチ、第1地区～第4地区の集石と実測及びこの地区的南側の壁の拡張。本日のところ東側の壁の一端と西側の壁の位置を知り、住居址であることを確認、本住居址を第8号住居址とする。発掘した面積は24m²、深さ50cm、床面まで後30cm、黒褐色土中より、薄手の土器片、羽状文を施したもの60片、石匕2箇、黒褐色土中より発見。

第9号住居址、第3号トレンチと第2号トレンチとの間に、幅50cmの壁を残して、第2号トレンチ内に2mの拡張を行ったところ、第9号住居址の南側壁面を突きとめることができた。また、第3号トレンチ内の一部に、プランを認めたが、本日のところ、これ以上プランの追求を止め、20cm程を残して掘下げを行う。この面では土器片の出土は多かった。また黒曜石のブレークがかなりの量発見される、この事実は注目すべきである。

第4号トレンチ、第10号住居址は北側の拡張により、北壁面のプランを確認、南側は本日のところ明確にすることができなかつた。担当は戸前博之、小池正美。

第6号トレンチ、第11号住居址、本住居址は、下平秀夫、小山が担当、第6号トレンチの南と第5号トレンチとを接合させ、黒褐色土の下段まで掘下げソフトローム面に達したが、住居址のプランは確認できなかつた。

第8～第9号トレンチ。両トレンチの褐色土を除く。第12号住居址の南コーナが確認できたので、第7・第8トレンチの表土を取り去ったところ、第12号住居址の他に2箇の住居址の存在することを確認する。昨日同様自然石が多い、この自然石は住居址内外に存在するが、あたかも壁上に堆石されている様である。出土遺物も多量、担当遠藤麻呂。

第11号トレンチ、トレンチの中心部の住居址らしきを東西南北拡張、ベルトコンベアを使用して耕土、住居址かと思われる箇所の周辺を全面掘下げてみたが、本日のところ住居址のプランは明かにすることができない。

出土遺物は、中越遺跡型式と云われる土器片、石器は黒曜石、石匕、打石器等、担当 堀津清志、木下平八郎、長野県教育委員会社会教育課神村指導主事の指導あ

り、松本點ヶ丘高等学校教諭中越道跡調査団員樋口昇一、木本日より参加、藤沢謙長研究室。

出席者

調査委員 横田義徳、平沢一男、樋田徳登、小田切良彦、友野良一、太田保、向山雅重。

事務局 宮木芳秀、春日幸男。

調査団員 藤沢宗平、樋口昇一、小松慶、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、鶴見雅麻呂、木下平八郎、根津清志。

協力者 加藤幾藏、井上政量、清水末吉、小林喜男、大長銀藏、春日松巳、北沢理智恵、三浦正雄、伊藤梅太郎、小林文吾、樋田源一郎、芦部政市、田中勝子、浦野定雄、天野彦吉、清水暉三、小田切幾造、浜田千代、木下進、小田切正明、加藤光男、吉沢翠、宮下富之進、神谷政雄、宮下八郎、伊藤みち子、赤羽ちかえ、保科つね子、平沢よし子、小林くにゑ、小林かつ子、吉沢たか子、馬場正雄、吉沢正広、春日一正、小田切島島、小木竹莊二、川手一郎、片桐哲、初崎常利、鈴木品道、桐山一郎、佐藤はな子、小木曾宗吉、小沢通子、富田正子、新井しげ子、棚房枝、春日金太郎、山口和子、鈴村説賀、境沢洋治。

中学生の応援あり。

9月4日 水曜日 晴

午前8時15分より作業開始。第6号住居址、担当小松慶、火災による黒色の灰層を除去、写真撮影後、床面まで掘下げて、4箇所に柱穴を発見、床面はあまり堅くない。

が址は住居址の略々中央、焼土のみ、周辺は認られるもあまり深くない、北壁は長手耕作のため荒れて一段底くなっている。午後実測。

第7号住居址、担当太田保、第6号住居址の発掘を終った方々の応援を得て南壁の埴装を重点的に行う。西壁から南壁にかけて、褐色土がかなり厚く分布している。西壁に近く筒体分の土器はかなり大型のものと考られる。南壁の埴装箇所床上から出土したかなり焼成の悪い土器と、西壁出土の1箇体分の土器との関係は、本住居址の時期を決定する重要な遺物である。住居址のプランは隅丸長方形乃至、不整円形に近いものである。

第8号住居址、南側を1.6mの抵抗し黒褐色土を除去する。午後東西南三方の壁を確認、統一して床面の検出ができた。壁に添って周辺を発見、深さ7~10cm内外、又周辺内にビット数箇を発見、柱穴は本日のところ、東北の筋が地主の許可を得てないので、やむなく作業を中断した関係上3箇しか発見できなかったのはまことに残念なことであった。が址は住居址の略々中央に花崗岩の半盤石を置いた程度のものである。土器は無文、斜状文の土器片、黒耀石片多數、主に発掘した人は、友野良一、樋田徳登、小木曾清志、吉沢たか子。

第9号住居址、本住居址は円形と考被っていたが、その後の調査で実際には隅丸の長椭円形であることが明かになる。昨日覆土20cm中に多量に出土した土器が床面に近づくにつれて減少する事実は、今後の発掘に興味深い疑問を投げ掛けてくれた。北側に2箇所の張出を発見したるもの性格は、本日のところ不明、担当佐藤政。

第10号住居址、住居址内の落込み掘下げ、住居址内を6



図6 第10号住居址壁断面



図7 第10号住居址発掘状況

区画して、出土遺物の詳細な記録に重点をおく。黒土中に1箇所良好な焼土あり、本住居址に関係あるものと思われるもの、遺物は黒色土に近い褐色土の落込みに多い。

担当 戸前博之、小池正美。

第11号住居址、南北に拡張した。トレント内を整理し検討したが確認には至らなかった。北側トレントを更に2m程北に掘広げて壁の確認を行う。午後北側から十字の観察壁を残し住居址内を調査。担当 下平秀夫、小山。

第12号住居址、第12号住居址は本日床面迄の調査を行う。本住居址は第13号住居址を壁より10cm程度おろす。住居址内部には褐色土の落込みが多い。

第26号住居址及び第25号住居址の調査を行ったが、自



図8 小学生の見学（第6号住居址）

黒石の出土とあいまって一層複雑になってくる。また、両住居址共床面は砂混りで良好ではない。石器類の出土が目立ってきた。

第14号・第23号住居址の調査、昨日までの木下平八郎氏が調査して来た後を樋口昇一団員が引継ぐ、第23号住居址を追うべく、第10号～第11号トレンチ間3m×4mの範囲の黒色土の除土を行う。午前中黒色土20cm程度を取去る。略中央部の黒色土に遺物の出土が多い、午後黒色土層のみを更に追う、この黒色土層は第8・第9号トレンチに關係を有し、河原石の散布が多く、作業はようやく進行しなかった。それでも夕刻近くになり、黒色土層は中央部にレンズ状に落込んだものであることを確認することができた。この河原石は黒色土を突抜けて茶褐色土層に喰込むものあり、土器の出土は多いが、中心は無文、薄手の中越1式。

これが層位的な知見を得られるかはやや不安、石器が黒土の中心部からまとめて出土14箇、齊製石斧1箇、石匕1箇。

出席者、中越遺跡調査陣顧問長野縣考古學会長藤森栄一氏、本日より調査に参加され、発掘全般にわたって指導を受ける。

調査委員 樋田義矩、平沢一男、向山雅重、篠田徳登、友野良一、太田保。

事務局 宮木芳彌、春日幸男。

調査員 樋口昇一、小松慶、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、慈那麻呂昌。

国学院大学生小池正美、同志社大学生吉朝、小山。

協力者 加賀幾成、井上政量、清水末吉、向山雅重、春日松巳、北沢理智恵、三浦正雄、伊藤梅太郎、篠田源一郎、芦部政市、天野彦吉、清水順三、小田切透造、浜田千尋、太田実、木下進、小田切正明、加藤光男、吉沢翠、宮下富之進、宮下八郎、伊藤みち子、深井ねね子、平沢よし子、小林かつ子、小田切千子、馬場正雄、吉沢東、吉沢正広、春日一正、初崎常利、湯沢品道、後藤真一、桐山一郎、砂場久江、佐藤はな子、小木曾吉宗、片桐晃、小野進子、堀房枝、山口和子、鈴村武賢、本田甲子雄、酒井さみ、福村久子、新井文弥、小木曾清、福田里子、山浦岩子、山浦志づ子、池上兼良、伊藤茂春、米山重、吉田一雄。



図9 村長ほか見学者

見学者、唐木村長、中村竜雄、村内外の見学者多数。

報道関係 NHK、中部日本新聞、読売新聞、朝日新聞、伊那毎日新聞の各社に午後1時発掘の成果を発表。

中学生の応援あり。

9月5日 木曜日 晴

作業開始9時、発掘も予定の中止となり、作業の見送りもつき関係者全員、発掘の大成果に大いに喜びあう。

第7号住居址は午後、太田保調査員一派残されていた箇所の清掃を終る。小松慶団員、断面図の作成。

第8号住居址は、友野調査員の欠席のため、小松慶団員がかわって調査、昨日第2トレンチの方向に拡張しなければ住居址の全容を明かに出来なかった状態であったのを、幸にも、地主の許可を得たので、調査することができた。中央に貯蔵所らしい深い凹みがある。住居址北断面は地図によくわかる、午後友野良一調査団員参加により写真撮影後、実測、本日はあまり遺物は出土しなかった。住居址のプランは、東西3.8m、南北4.5mの隅丸方形窓穴住居址である。

第9号住居址は前日に引継いで佐藤政団員が中心となり調査を進行中。

第10号住居址、床面及び壁面の清掃、北に重なっていると思われる住居址の確認。この結果、中央焼土の5cm程下よりロームの堅い床面が出土、北側に予想した住居址なく、それは掘り足なかったと判明、本住居址の床面に密着する遺物は殆どなかった。

第3トレンチ第17号住居址は小池正美氏を中心として調査、トレンチ内のみで住居址のプラン、及び大きさはつかめないが、南に壁の曲った廻廊が僅か出土した。遺物は黒褐色土中に多く発見される。表土下50cm、黒褐色土層より径4cmの小型土器1点を発見。

第11号住居址、住居址内1・2区の調査、2区東側の壁は二重になっている。1区には周溝らしきを発見。

第12号住居址及び第25号住居址は、第26号住居址によって切れたものである事實を確認する。第12号住居址第13号住居址の床面はきわめて良好、第25・第26号住居址の床面は河原石の落込みが甚しい關係で、河原の荒い砂の如き面をなしでいる。午後



図10 第26号住居址—様が多い。

第13号住居址の床面調査一部床面が破壊されている。ピットは4箇所、その内2箇所のピット内に石が落込んで

いた。住居址中央部の凹みには平らな自然石がおかれていた。第26号・第25号住居址の壁上の自然石は、ローラー面にまで達するものが多く存在していること、それと床面をなす河原砂の如き面との解釈は早急につき難い問題となった。本地区は遮那团員を中心として調査。

第14号住居址、前日に引続いて黒色土の除去を全面的に行う。その結果、第10~第11号トレンチ間第5地区寄に茶褐色の土層があらわれ壁らしい面が出る。更に黒色土を掘下げると、壁面と思われる層が2箇所現れたが、まだ正確でないのに明日にその決定を持ちこす。遺物は黒色土中に多い中越I~III式が混在、褐色土層中には極めて遺物は少いようだ、層位的な考察も可能か、石器3、石匕2、エンドスクリュー1、本日の発掘成果を記録するため団員はおそらく現場の整理に当る。

見学者 伊那市教育委員一行、村内一般の見学者多し。

出席者

調査委員、細田義徳、馬場一人、平沢一男、平沢茂、田中義蔵、篠田徳登、小田切良彦、友野良一、太田保。

事務局 春日幸男、宮木芳秀。

調査団員 樋口昇一、小笠處、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、遮那麻呂昌、国学院大学生木村幾多郎。

調査団員補助、国学院大学生小池正美、同志社大学生吉朝、小山。

協力者 加藤幾歳、井上政量、清水末吉、小林喜男、向山雅雄、大長銀蔵、春日松巳、三浦正雄、伊藤梅太郎、篠田源一郎、芦部政市、天野彦吉、宮下寅男、小田切幾造、浜田千鶴、太田実、木下道、小田切正明、加藤光男、宮下八郎、保科つね子、平沢よし子、小林かつ子、吉沢たかね、馬場正雄、吉沢実、吉沢正広、春日一正、桐山一郎、小木曾宗吉、小沢通子、柳原枝、鈴村誠賀、伊藤茂春、米山薰、吉田一雄、篠田雪子、三浦千代子、橋本和子、春日立恵、本田浩子、加藤藤吉、伊藤孫武、新井正三、酒野多一。

9月6日 金曜日 晴

午前8時10分作業開始、第10号住居址、南北に残したセクションベルトの実測及び撮影、黄色土、褐色土、黒色土の各層位を明確にすることができた。黒色土、褐色土層中には遺物を多く発見できたが、黄色土には発見することができなかった。担当、戸前博之氏。

第11号住居址、本住居址内の3・4区の調査を行った結果、第1の溝をもつプランを第2のプランが切り、第2のプランを第3のプランが切り、第3のプランを第4が切ったものと考えられる。担当 下平秀夫。

第18号住居址、本日はベルトコンベヤーを使用して相当の土量をトレンチ外に運び出し、調査を拡大する。調査の結果、表土より50cmまでは無文土器の細片のみ、黒耀石の謎、棒状先尖石器2、打斧、円形石器、土器底部3箇、50~75cmまで、棒状先尖石器、石匕、石器はタテ型、土器は特記すべきものなし。以上の出土状況は今後住居址の充実に資するところが大きいと思う。本日のところ住居址のプランは不明である。太田保氏担当、第26・第25号住居址のセクションベルトをはずし写真を写し、この地区的調査は終了。

午後第24号住居址を調査、本住居址は作業上と調査団員の都合により1/4のみしか発掘できなかつた、第12号住居址と第24号住居址との間の大ピットには、黒色土が充満していてその中に木炭片も見受けられた。第13号住居址の南壁の検出、作業を終わる。

第23号、第14号住居址は引続いて、樋口昇一、木下平八郎両調査団員が中心となり発掘。

本日の見学者 飯田市大沢和夫先生、諏訪二葉高等学校教諭原健先生、発掘に参加される。

出席者

調査委員 細田義徳、平沢一男、向山雅雄、平沢茂、篠田徳登、小田切良彦、友野良一、太田保。

事務局 宮木芳秀、春日幸男。

調査団員 樋口昇一、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、遮那麻呂昌、木下平八郎、木村幾太郎。

調査団員補助 国学院大学生、小池正美、同志社大学生吉朝、小山。

協力者 井上政量、清水末吉、小林喜男、向山雅雄、大長銀蔵、春日松巳、三浦正雄、伊藤梅太郎、篠田源一郎、天野彦吉、清水唱三、小田切幾造、浜田千鶴、太田寅、木下道、小田切正明、加藤光男、吉沢翠、宮下八郎、平沢よし子、春日なかえ、吉沢たかね、吉沢正広、春日一正、用手一酒郎、湯沢晶道、小沢通子、柳原枝、山浦志づ子、山浦岩子、米山薰、吉田一雄、橋本和子、加藤清吉、城倉茂、田中要治郎、後藤義雄、飯島福志、加藤とよ、黒川内あさよ、城倉千春、後藤久子、三沢とし子、丸山季子、田中登美子、飯島ふじよ、加藤きし子、丸山静子、市瀬玉枝、田中きわ子。

9月7日 土曜日 晴

8時5分作業開始 第7・8・15号住居址の実測、第8号住居址は完全に発掘することはできなかつた、第15号住居址は、朝原健氏が第3トレンチにかかったところのみ調査し第2トレンチに顔を出していたものと国上で連絡させる。



図11 第9号住居址

第9号住居址の調査は複雑のため、佐藤政調査団員と木村幾太郎調査団員を中心として引続いて調査、本日は実測と清掃。

第10号住居址、戸前博之調査団員を中心に引続いて調査。



図12 第9号住居址の概

第11号住居址、本住居址の全体が掘り上り、東西2本のセクションベルトを取り、プランのまわりを調査したるも、他との関連は判明しなかった。

第18号住居址、ベルトコンベアを使用して除去作業能率を計る。南壁及び東壁を決定、西壁は今のところ不明、南壁から東側にかけ褐色土の層が広く分布、第5トレンチの黒色土の深い層との間に遺物の層位的な差が求められるか試みてみる。東壁褐色土中から薄手無文土器1箇体分、特に尖底部が出土した。第18号住居址1箇と考えて発掘を進めたのであるが、床面を清掃したところ、2以上の住居址が複合している事実を確認、このことは柱穴の深さ、周辺等の位置からあまり時間差がない現状ではないかと考えられる。担当：太田保・根津清志、御子柴恭正の三氏。

第23・26・13号住居址のセクションをとる作業、第13号住居址の西側ビットの調査、第12号住居址西側のビット及び第24号住居址南側ビットの調査、第21号住居址の確認。それぞれのビット内から石器、石碑、土器片が出土した。これら各住居址の実測。



図13 第14号住居址—SBCの撮影

第14号・第23号住居址は、樋口昇一・調査団員より引継いで、木下平八郎、根津清志調査団員が調査に当り不十分の箇所を調査。

林指導主事来村、藤森栄一先生SBCの特別番組の指導、藤沢宗平団長到着、信濃毎日新聞の写真撮影。

出産者

調査委員 平沢一男、平沢茂、鶴田徳登、小田切良彦、友野良一、太田保。

事務局 宮木芳弥、春日幸男。

調査団員 藤沢宗平、藤森栄一、佐藤政、戸前博之、木下平八郎、下平秀夫、遠野麻呂、根津清志、御子柴恭正。

調査団補助員 小瀬正美、吉朝、小山。

協力者 井上政量、清水末吉、小林喜男、春日松巳、北沢理智、三體正雄、鶴田原一郎、天野彦吉、小田切義造、浜田千年、木下道、小田切正明、加藤光男、吉沢翠、平沢通子、堀房枝、米山薰、吉田一雄、加藤藤吉、城倉義、田中要治郎、加藤とよ、黒河内あさよ、城倉千春、飯島ふじよ、山田はるみ、浦野八重子、白鳥あき子、小田切よ志江、牧田智恵子、牧田恵子、平沢正子。

9月8日 日曜日 晴

8時10分作業開始、第11号住居址は一部清掃を終わる。第10号住居址は壁上にビットを発見、これは極の仕ではないかと推定されるもの、坑土面での撮影を終わる。



図14 第11号住居址

第9号住居址は張床を掘下げたところ、一部に別の住居址を発見、佐藤政調査団員続いて調査第12・24・13・25・26号住居址の調査不十分の箇所を遠野麻呂団員が調査。

第18号を中心とした周辺の遺構を調査。

見学者：駒ヶ根郷土研究会長氣賀沢善左、門。

林指導主事。

小松慶調査団員 発掘に参加。

午後1時止して借用したベルトコンベアの片付、本部の天幕取はずし、机、腰掛等中学校に運ぶ。

午後16時50分福祉センターに集合、遺物整理及び後仕事について打合せを行う。つづいて解散式を行い、8時間にわたる発掘を一応とする。

出席者

調査委員 鶴田徳登、平沢茂、鶴田徳登、小田切良彦、友野良一、太田保。

事務局 宮木芳弥、春日幸男。

調査団員 藤沢宗平、樋口昇一、佐藤政、戸前博之、下平秀夫、遠野麻呂、木下平八郎、根津清志、御子柴恭正、本田秀明。

調査団補助 小池正美、吉柳、小山。
協力者、春日松巳、小田切茂蔵、木下進、加藤光男、
吉沢正広。

9月9日 月曜日 晴

本日より、下平秀夫、戸前博之、遮那麻呂、佐藤政の四氏にて後に残された箇所の整理及実測。



図15 第25、26号住居址

第11号住居址、清掃完了、周辺が略方形にまわっているのを発見。午後写真撮影、担当下平秀夫。

第25・26号住居址の一部調査、担当遮那麻呂。

第10号住居址、焼土の部分を残して床面の掘下げ、担当 戸前博之。

第9号住居址の下に第31号住居を発見、担当佐藤政
第18号住居址、床面の調査 担当太田保。

航空写真撮影の予定であったが雨のため延期。

見学者 伊那市教育委員、中部日本新聞、小学校児童
多数。

事務局 宮木芳弥、春日幸男。

調査団員 下平秀夫、戸前博之、遮那麻呂、佐藤政。

9月10日 火曜日 晴

第11号住居址の清掃、実測及び写真撮影、午後第14・
第23号住居址の実測。

見学者 岩林署員4名、村民多数。

出席者

調査委員 須田義徳、友野良一。

事務局 宮木芳弥。

調査団員 下平秀夫、戸前博之、遮那麻呂、佐藤政。

9月11日 水曜日 晴

午前8時10分作業開始、一部住居址の実測及び全体測量、千石平まで、地形写真撮影に登る。9月1日より発掘を開始してから11日間 須田義徳教育長を先頭に、調査委員、調査団員、老人クラブ、婦人会、青年会、小中学校児童、生徒等の献身的な努力と、晴天に恵まれて予想外の成果を上得たことは、関係一同と共に喜びにたえない次第である。

見学者 中部日本新聞、高流町教育委員会、村民多数。

出席者

調査委員 須田義徳。
事務局 宮木芳弥。
調査団員 下平秀夫、戸前博之、遮那麻呂、佐藤政。

9月12日 木曜日 晴

延期になっていた航空写真撮影のための準備に、宮木芳弥、春日幸男両氏 8時20分集合、現場の障害物を取去る。中越遺跡発掘を中心とした下平秀夫、戸前博之、遮那麻呂、佐藤政の四氏を送る。

9月17日 火曜日

発掘現場の埋立、調査委員一同記念撮影。その後9時ブルトーザーにて埋立、機械故障にて11時作業中止。

出席者 須田義徳教育長、太田保、馬場一人、鶴田徳登、平沢一男。

事務局 宮木芳弥。

午前中にて解放。

9月19日 木曜日

機械故障のため、中止となっていたが部品も到着したので修理し、午前8時30分~10時まで埋立修了、本日の当番、宮木芳弥。

9月21日 土曜日

ブルトーザーの修理後のすき起し完了。

9月22日 日曜日

午前10時40分、宮田福徳センターに於いて、中越遺跡出土遺物の整理及び実績報告書作成に就いての打合会を開催。

教育長挨拶、中越遺跡の無事終了した報告。遺物整理、方法、報告書作成等に就いて十分協議してもらいたいとの要望あり。

調査団長の挨拶「中越遺跡は関係者各位の御努力にて予想以上の成果をあげた事に対して、皆さんと共に喜びたい」と挨拶があり、調査団員各位の分担して書いてもらう箇所を担当、10月10日までに宮田村教育委員会にて送らう事、実績報告書作成に必要な資料の研究等を行った結果、詳細は福徳センターに一任する事と決める。遺物の水洗は10月末までに実施。

44年1月10日

編集委員会 福徳センターにて 向山雅重、木下平八郎、友野良一、太田保、須田義徳。

44年1月22日 水曜日

遺物の整理及び写真撮影、木下平八郎、友野良一、須田義徳、太田保。

44年1月23日 木曜日

遺物の整理及び写真撮影 木下平八郎、友野良一、須田義徳。

本遺跡の調査に当って、駒ヶ根法務局勤務の山田年氏の献身的な努力に心より感謝する。（友野良一）

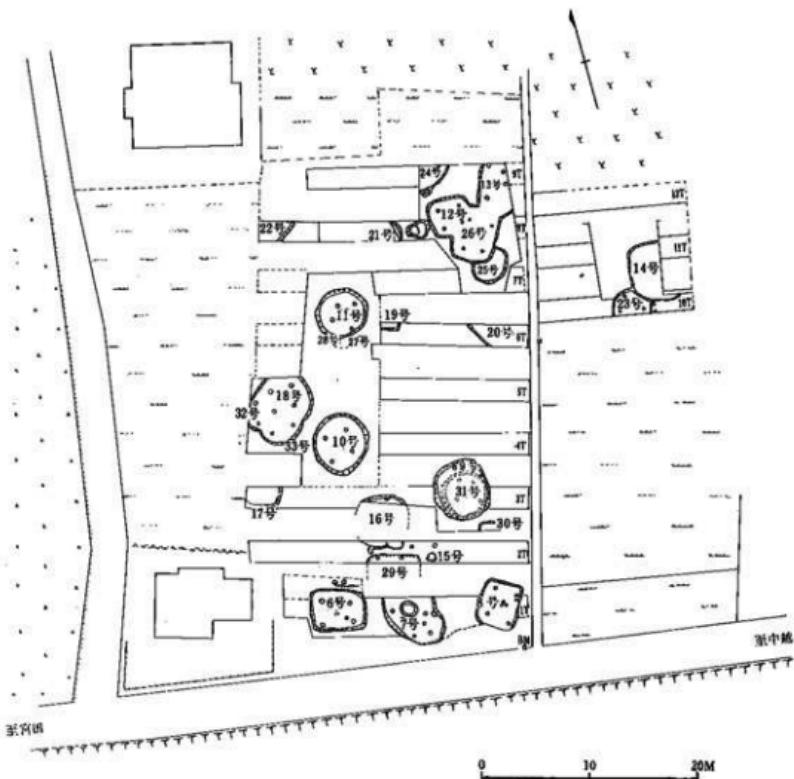


図16 中越遺跡分布図

発掘調査の結果

(+) レンチ

| レンチ番号 | レンチ内 の 主要 状態 | 調査によつて発見した住居址 |
|------------------------|--|-------------------|
| 第1 レンチ 幅 2 m 長さ 20m | 黒土層中から褐色土上層に拡大の集石群2ヶ所と人頭 大自然石の列石1ヶ所発見 | 6号 7号 8号 |
| 第2 レンチ 幅 2 m 長さ 24m | 耕土及び黒色土層50~55cm以下褐色土層になる | 15号 29号 30号 |
| 第3 レンチ 幅 2 m 長さ 26m | 耕土及び黒土層20~30cm 黑褐色土層20~30cm 遺物少 量、暗茶褐色層4~10cm遺物包含層砂質ローム | 9号 16号 17号 31号 |
| 第4 レンチ 幅 2 m 長さ 26m | 耕土及び黒土層、遺物少なく褐色土層から遺物が多く 70cmで砂質ロームになる | 10号 33号 |

| | | |
|----------------------|---|--------------------|
| 第5トレンチ 幅2m 長さ26m | トレンチ調査なし | 18号 32号 |
| 第6トレンチ 幅2m 長さ22m | 耕地及び黒土層20m褐色土層に続き配石址一個所発見 | 27号 28号 19号 |
| 第7トレンチ 幅2m 長さ24m | トレンチ東側より10m区割を調査。表土及び黒土層30cmを調査で終了する | 25号 |
| 第8トレンチ 幅2m 長さ24m | 耕土及び黒土層55~60m黄褐色ロームへ55~60cm層位に遺物多い | 12号 21号 22号 26号 |
| 第9トレンチ 幅2m 長さ20m | 耕土及び黒土層30cm取除く地表土30cm人頭大の自然石が現われる | 13号 24号 |
| 第10トレンチ 幅2m 長さ18m | 耕及び黒土層35~50cm黄色土層になる、住居址内に人頭大自然石が出上 | 23号 |
| 第11トレンチ 幅2m 長さ18m | 耕地及び黒土層20~30mm、黒土層中から人頭大の自然石が多く、混入遺物は褐色土層から多く出土する | 14号 |
| 第12トレンチ 幅1m 長さ19m | 耕土及び黒土層30m褐色土層になる。黒土層中から人頭大の自然石が現われた | |

(2) 住居址

- 6号 長方形 東西5m 南北4.1m 4主柱、床面砂泥ロームで軟かで不安定、周邊あり、炉址中央床面はすく焼けている。
薄手丸底に近い尖底土器2個体床面にあり、石鏃、石七、スクレーパー状石器、石皿、穀器。
- 7号 長方形 東西3.3 南北6. 住居址北側木堀柵であるが、住居址複合している。主柱4?、炉址不明、床面軟らかく不安定、中央部一段と深い地域あり。
薄手無文丸底に近い尖底土器破片多し。穀器、棒状石器、石鏃、石七。
- 8号 長方形 東西2.9 南北4.5 主柱4、補柱1、床面たたいて固く良好、住居址中央部に平盤石をそえた床面が焼けた炉址あり、各所にピットをそえた周邊全体にみとめられる。
無文、羽状縫織土器片、黒曜石製石鏃、打製石斧。
- 9号 隅 丸 長方形 東西5.33 南北4.55 主柱4、中央や少西より東を開いた三方面の石組炉、床面褐色土を貼りつめた叩いたもの。
- 10号 円形 東西5 南北5.4 穴状耳飾、石鏃、石七、敲石、磨石、土器小破片。
主柱4、壁周囲にピット9個あり、炉址中央にややくぼんで焼土あり。
柳葉石鏃、アメリカ鏃、薄手無文及び細縫文土器破片が多い。

- 11号 円 形 東西南北 主柱4, 東西南西周壁に周溝あり, また主柱間にも溝があり。
- 12号 隅 丸 形 東西3.75 南北3.80 主柱4, 中央や北西寄り凹みがあるが焼土なし。周溝なし。
石鐵, 石皿, 磨石, 土器, 薄手破片が出土。
- 13号 方形 東西約4.70 南北約4.00 完全に発掘出来ない, 床面硬く良好。
石鐵, 石匕, 碾器, ドリル, 上器破片, 豊富に出土する。
- 14号 隅丸方形 南北 住居址西半分だけ調査, 4主柱が周溝住居址西側に発見。
石鐵, 石匕, エンドスクレバー, 無文土器大形破片。
- 15号 第2トレンチ内だけの調査による, 又住居址西側では住居址が複合しているものと考えられる
薄手細線文土器, 破片など出土, 石匕, 石鐵, 碾器。
- 16号 第3トレンチ内の調査で住居址の確認に終るプラン不明。
- 17号 第3トレンチ西側に発見トレンチ幅以内の調査プラン不明。
- 18号 隅丸方形 東西約4.5 南出約4 4主柱, 床面砂質ロームで歛らかく不安定, 炉址不明。
周溝一部あり, 又3個以上の住居址複合している。
縄文ある土器片, 薄手無文土器, 石鐵, 石匕, 碾器, 棒状石器。
- 19号 第6トレンチにおける住居址の確認調査は出来ず。
- 20号 第6トレンチにおいて住居址を確認したので調査は中止した。
- 21号 第8トレンチに6~8区にかけ住居址を発見ロームを掘り込んだ床面を確認したプラン不明。
- 22号 第8トレンチ11~12区にかけ住居址を発見, 床面周溝を確認する。
- 23号 円形 東西3.9 住居址 $\frac{1}{3}$ が発掘できなかつたので全形不明, 主柱4と推測出来, 炉址不明。
細い沈線文ある土器, 無文土器いずれも底部まで薄手の尖底土器である。
石皿, 石匕, 石鐵, 碾器。
- 24号 12号住居址, 北西隅に統いて発見し $\frac{1}{4}$ を調査。おそらく円形のプラン考へられる。
- 25号 隅丸長方形 東西3.37 南北2.70 床面ロームなく砂疊が河原状で床面悪い, 又住居址, 大小自然石の堆積いちじるしい, ピット, 炉址不明。
造物も少ない。
- 26号 長方形 東西3.95 南北5.10 25号と同じく床面, 河原状床面, 炉址, 周溝不明, 主柱4,
土器細片, ドリル, 石鐵, 磨石, 石匕, 碾器。
- 27号 第11号住居址と複合してプラン不明, 周溝の一部と考へられる遺溝が発見されている。
- 28号 第1トレンチ7号住居址北側より第2トレンチの15号住居址に復合する住居址,
- 30号 第2トレンチ第1区東側に住居址を確認住居址の西と北壁と床面の一部を調査する。
- 31号 円に近い隅丸方形 東西4.1 南北4.3 土柱4, 周溝全体にあり, 炉址不明, この住居址は第9号住居址の下にあり。その差僅かである。
出土遺物が少なく, はっきりしない。
- 32号 18号住居址西壁にかなり複合して発掘区以外に土体がある住居址。
- 33号 隅丸方形 不明 4主柱, 18号, 32号おそらく18号の北側に1個以上の住居址があると考えられるが, 今回調査出来なかった。
無文薄手土器, 石鐵, 石匕, 碾器。

(太田 保)

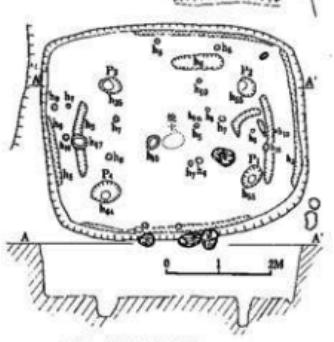


图17 第6号住居址

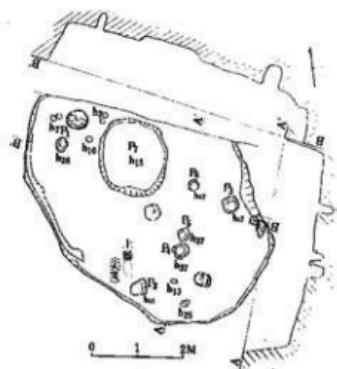


图18 第7号住居址

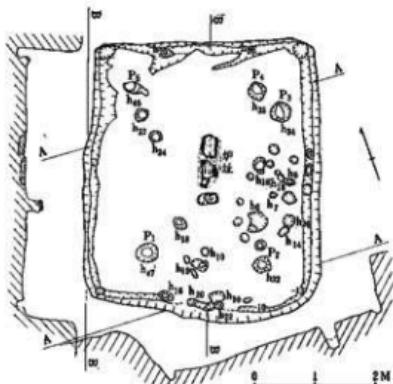


图19 第8号住居址

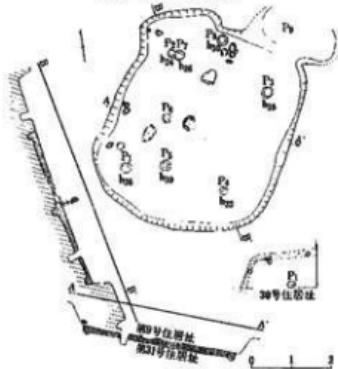


图20 第9号住居址

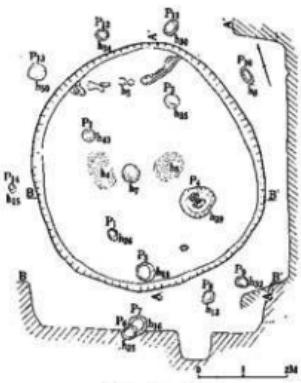


图21 第10号住居址

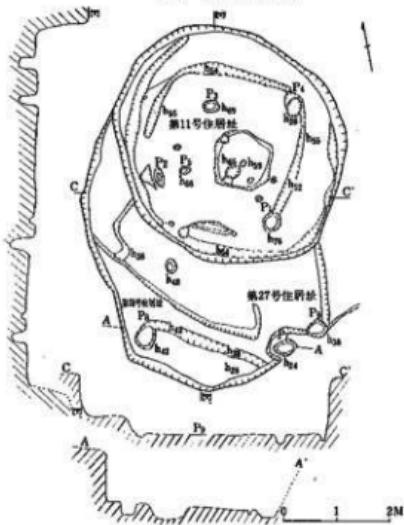


图22 第11号住居址

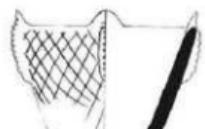
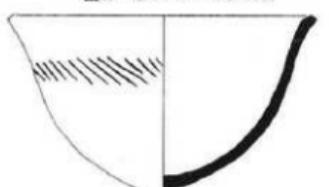
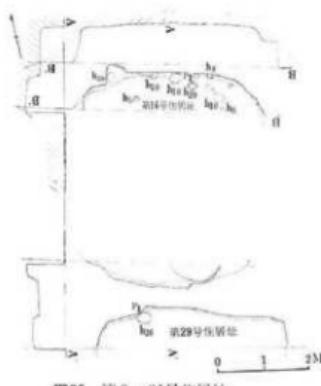
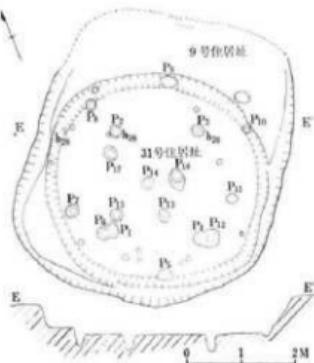
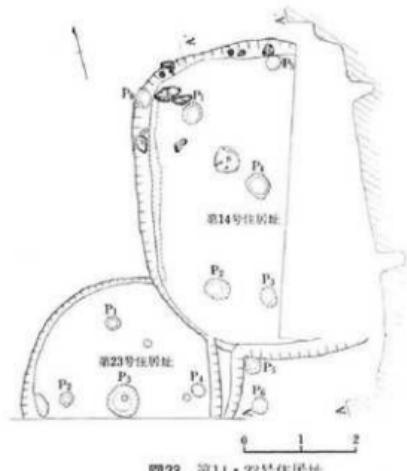


图27 土器 (上: 9号住居出土 下: 14号住居出土)



图28 第13号住居出土石器
(右上1箇: 3.9g 右下1箇: 中央箇: 3.6g
(左は右跡)

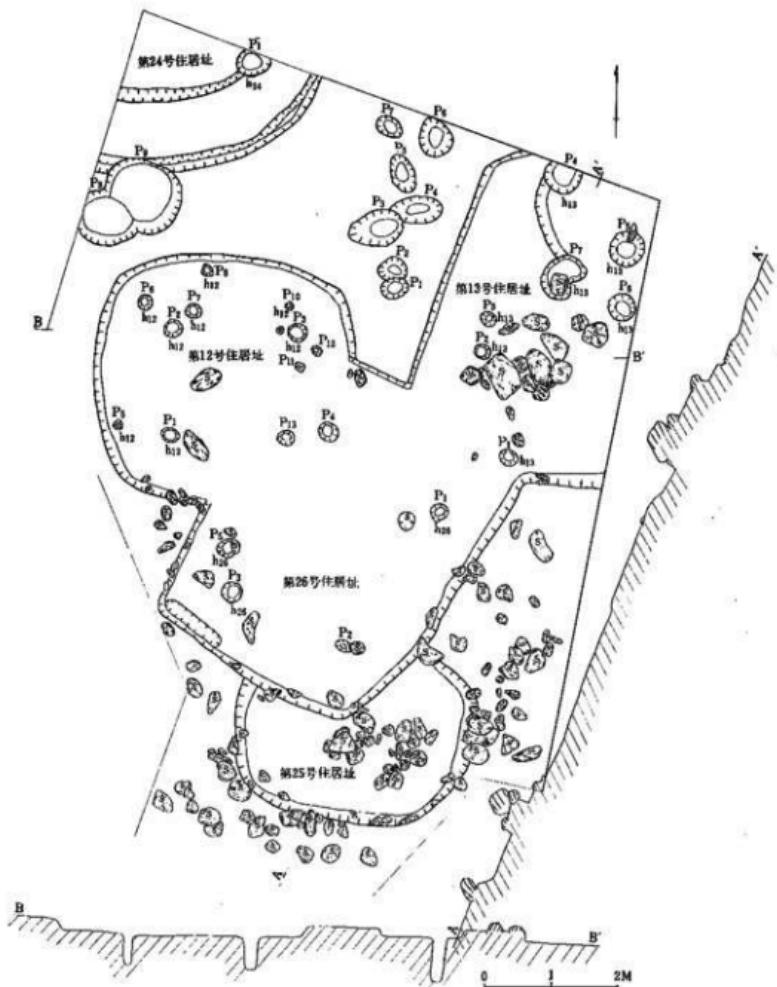


圖29 第12・24・25・26号住居址

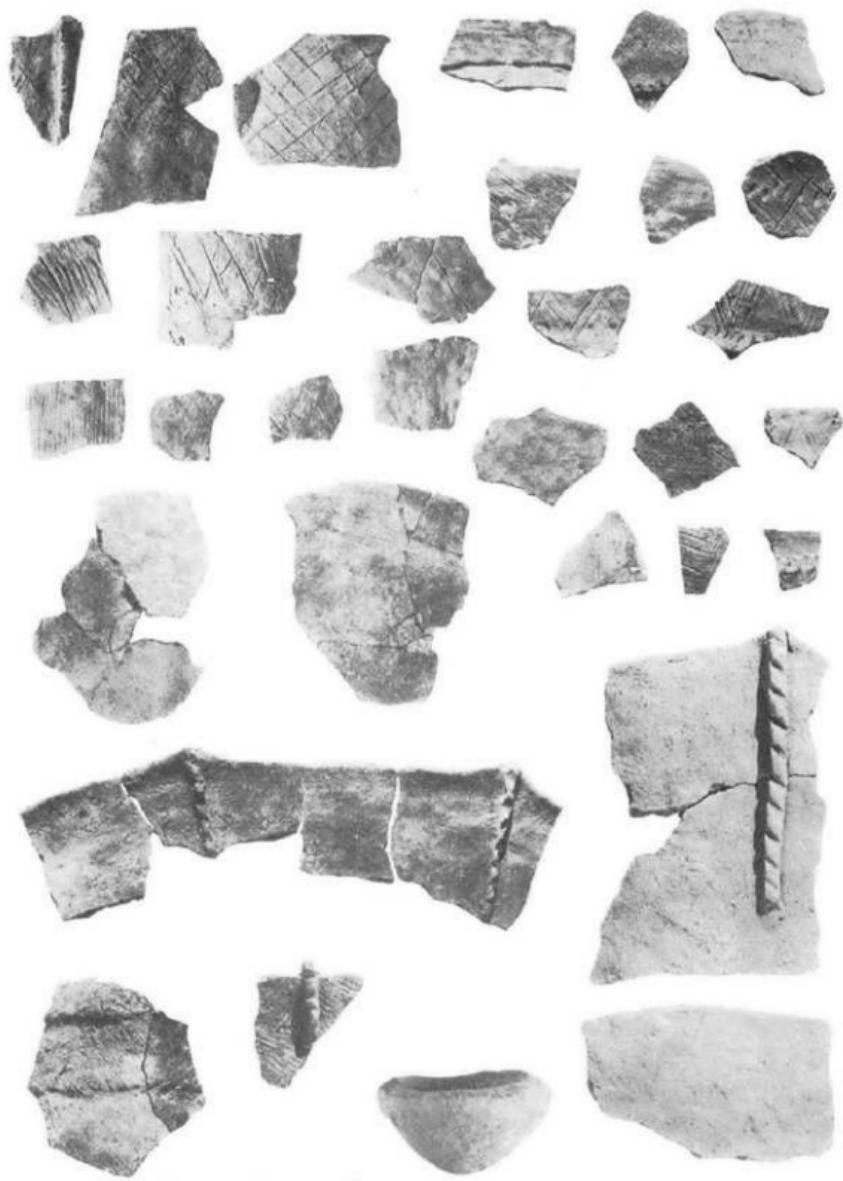


図30 中越遺跡出土の土器



図31 中越遺跡出土の土器・骨片

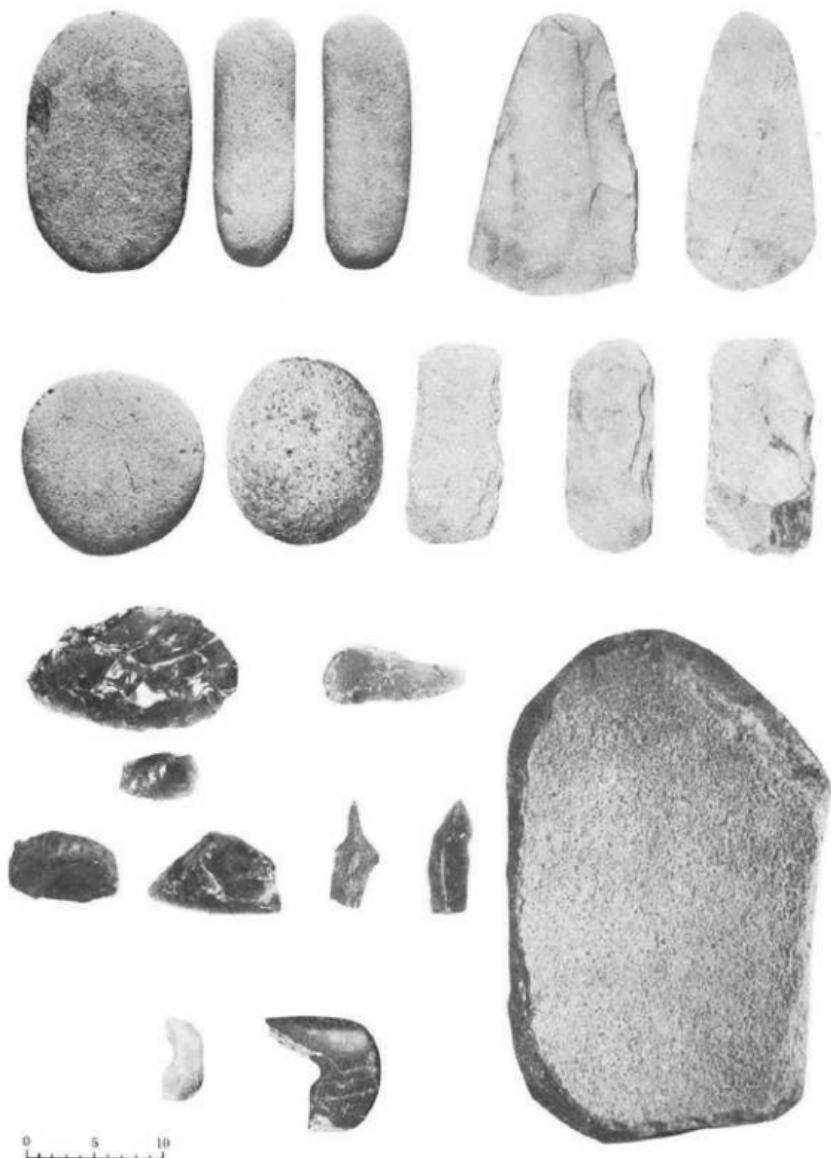


図32 中越遺跡出土の石器

(左上5箇 積頭。右上5箇 打削石錘
 下左4箇 ハンドストラッハム。下中2箇 ドリル。下右1石目)
 左下端2箇 破片石錘

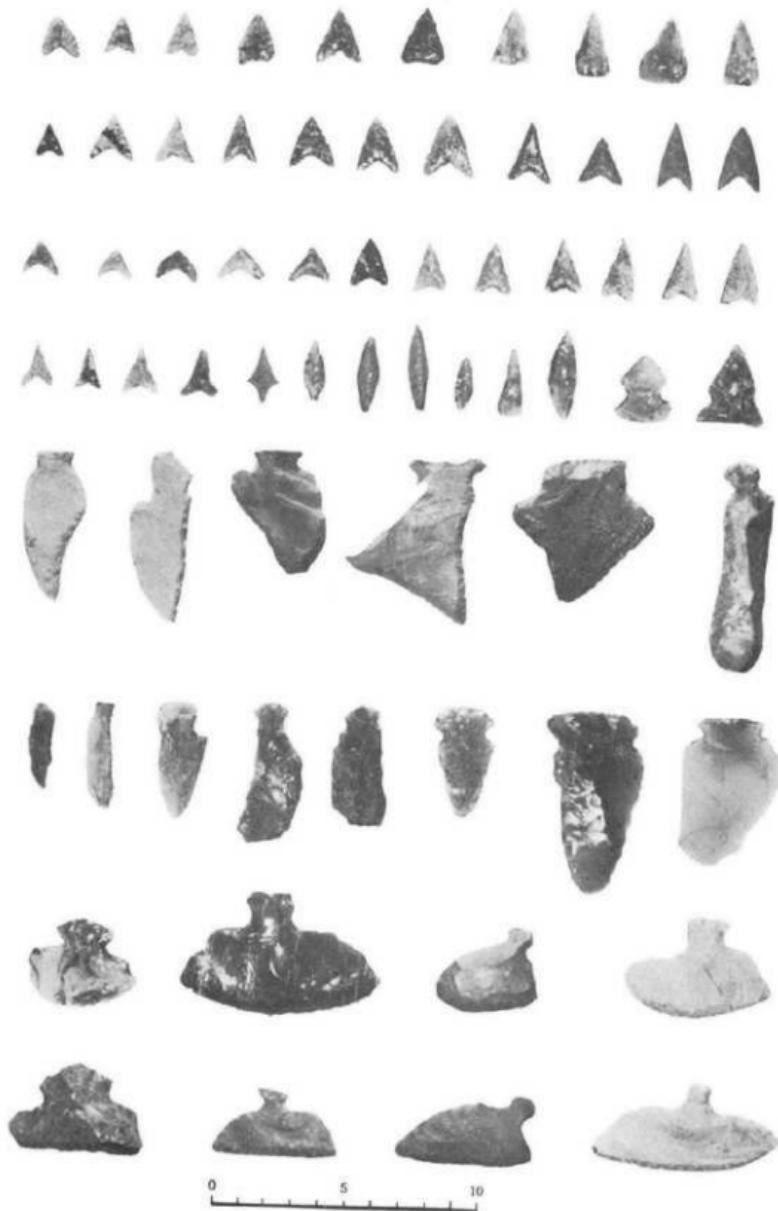


図33 中越遺跡出土の石器
(上4段は石鏃)
(下4段は石器)

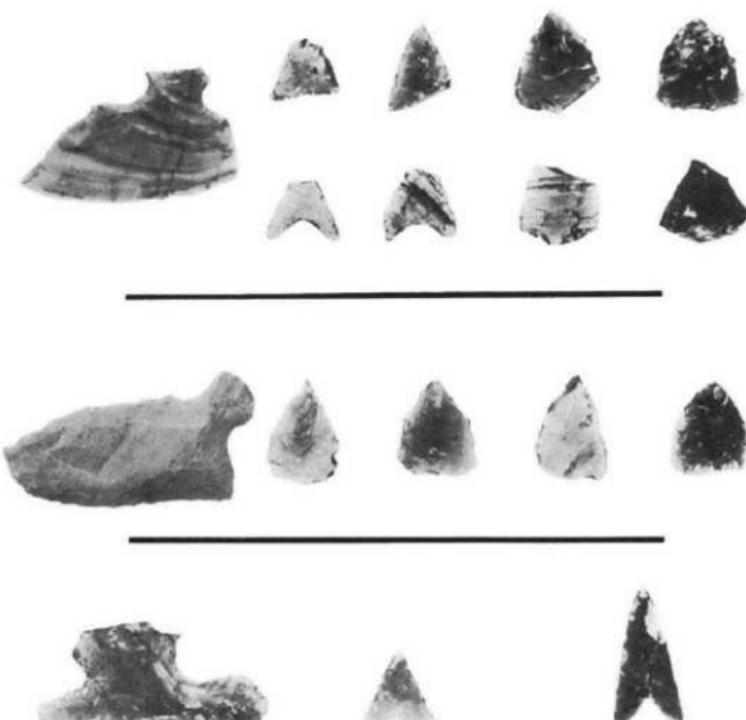


図34 第23号住居址石とに並行する石器

(上 褐色土上層)
(中 褐色土下層)
(下 黒 面)

ま　と　め

今回の発掘調査を通じ、堅穴住居址のプランのはっきりしたもの6箇、その大半を知りえたもの5箇、その存在を確認するにとどまった程度のもの17箇など合計28箇を数える。これをそれ以前の発掘調査によるもの5箇を加えると32箇となる。

縄文文化の早期から前期への移行期という、概して縄文文化の古い時期に、しかも、おそらく土器形式にして三ないし四形式に分類可能な僅かの時間に、さらに狭い範囲の地域にこれ程多くの堅穴住居がそれぞれ接近してその存在を知られたということは、甚だ、珍しいことではないかと思われる。

現在の遺跡の破壊とそれを追う緊急調査がつづいていく限り、いつかは同じような例があらわれるに違いないが、今日のところ、あだかも中期集落のそれのように密集していく驚くのである。

ここで堅穴住居の問題は、その密度度にあることも勿論であるが、その形態の変化にあると思われる。第一の形態は、円形ないし隅丸の方形に近いもの、第三の形態は、長方形（関東地方では梯形・台形と呼ぶものに類する）のもの、第二の形態は、その中間にに入るものである。もっとも、第二の形態は一つの規格的なものがあるわけではなく、個々の住居そのものに僅かながら変化を求めることができ、第一と第三の形態が抽出できるために、そうでないものが第二の形態として区別されるのであって、方形に近いものなら長方形に近いものに至る過程で生ずるものらしい。ここでは、この住居の平面プランの変遷のうちに、縄文文化の早期から前期への移行過程を見ようとするのであって、これは、縄文土器のうちにも同じ変化が求められるのではないかと思われる。

この遺跡出土の縄文土器は、その器形からは大きく尖底土器と平底土器の区別ができる、造器の際における器壁の厚さの上からも薄く薄手土器と然らざるものとの差がみられ、また、施文具の上にも籠もしくは半截竹管と櫛目様施文具ないし爪形文手法に加えて各形式を通じて縄文の利用がみられる。これらの施文具に基づく文様を組合せてみると、三ないし四形式の土器分類がなされ、それぞれ前述の住居プランの変遷とかかわりあうものと推定されるのであるが、今回の発掘では、まだ十分にその関係を明らかにしたいたいことはできない。長方形プランの住居にこの地点の終末土器（関山式、神ノ木式土器に比定されるもの）が伴うらしいこと、円形ないし隅丸方形のプランにはやや厚ぼたる波状口縁の頂きから垂れ下る凸帯をもつ尖底土器が出土するらしいことは確かと思われるが、その他の極く薄手で半截竹管による刷毛目風の条線文と刺突文の組合せのもの或は極く薄手の爪形文ないし擬似爪形文を施されたもの（器面の平滑なもの、それがなされずに器面に凹凸がみられるもの）などがいずれも同時期のものかどうかということになると、その層位関係はまだ明らかとなっていない。縄文文様にも簡単なものから複雑なるものといろいろみられるが、これもどのような秩序をもつかということになるとその内容はまだ不明確である。

さらに、石器などについても、石鎌・石匕・石錐・打製石斧・磨製石斧・礫器・凹石などが出土し、そのなかで第一に石鎌・石匕の出土が多いこと、第二に礫器の存在、第三に石器製作工具と思われる両端加工の棒状石器の出土などが特徴的である。礫器は早期末から前期初頭に現われると思われるもの、石鎌・石匕の多いことは、この遺跡の性格を物語るものである。なお、この外に垂飾具として滑石製の甲状耳飾が出土している。

最後に、天竜川上流の右岸段丘上に、ぽつりと位置づけられるこの遺跡は、遺跡の立地の上からも早期終末期から前期前半期に及ぶ縄文文化の最もよい資料を残していると思われる。

(1969.2.2 藤沢宗平)

昭和44年3月25日発行

長野県上伊那郡宮田村

宮田村教育委員会

(信教稿)